

# 他の先生との連携を 活用する

新潟県新潟市立鏡淵小学校校長

はしもとさだお  
橋本定男

## 学級づくりと他の先生との連携活用

学級づくりの出発にあたり、他の先生との連携の活用を構想するとき、次のように考えるとわかりやすい。

学級づくりの課題を大きく三つにくくる。土台づくりと居場所づくり、危機対応である。また、他の先生との連携活用を三つのタイプに分ける。人材活用と情報活用と組織活用である。それらをクロスさせると、当面の学級づくりのテーマが浮かんでくる（次頁の図1参照）。

### (1) 学級づくりの三つの課題

三つの課題は学級づくりの基礎・基本だと考える。

一つ目の『土台づくり』とは、担任の進めるすべての教育活動がその教育としての機能を発揮するための環境をつくることである。

出発点においては、人間関係づくりや学級集団づくり、学級の組織・ルールづくり、そして共有の目標づくり（根底に共有価値づくり）などが課題になる。土台は温かく、支持的でなければならぬ。と、述べることは簡単だが、高い教師力が求められる。

二つ目の『居場所づくり』は、個々の子どもがその学級に所属感をもち、受け入れられ、尊重され、よさを発揮する場をもてるように働きかけることをいう。これは一つ目の温かく支持的な環境をつくる努力と表裏の内容になる。同じことだとも言えるが、分けて自覚したほうがよい。出発点では何よりも「所属感」である。三つ目の『危機管理』とは、いじめ問題・不登校問

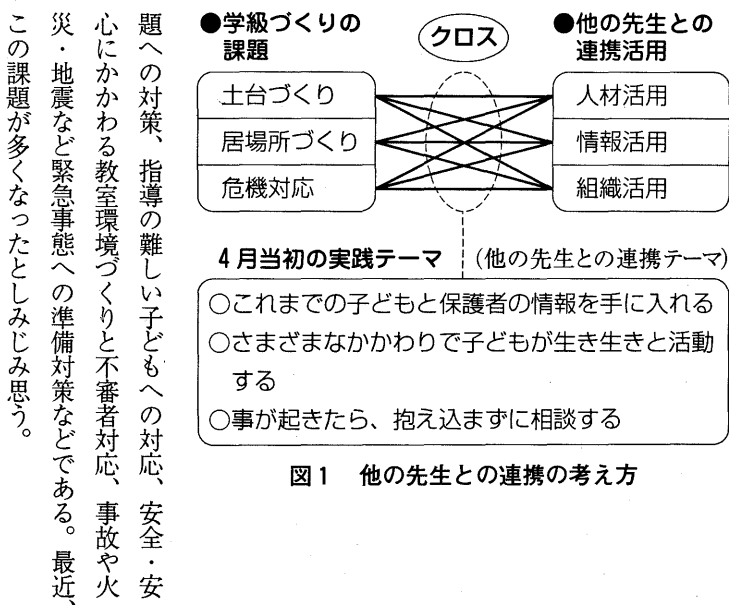


図1 他の先生との連携の考え方

を「先生」として活用することも含む。協力をお願いし、実際に動いてもらうので、良好な人間関係と、適切にコーディネートする力が求められる。

二つ目、『情報活用』とは「いろいろな教えてもらうこと」つまり、人から聞く情報のことを言う。これも、他の先生だけでなく、関係するさまざまな方々との情報ネットワークが大切になる。ここにも人間関係が求められる。

三つ目の『組織活用』は、学校の組織としての側面や校務分掌などを活用すること、そして学校外の諸施設・機関を活用することである。ただし学校内では、実際のところ、自覚されず活用に至らない場合も多い。大切な校内組織が認知されていなかったり、機能していなかったりするからである。これは、むしろ管理職が悪い。

### (3) 出発点におけるクロス

以上の「学級づくりの課題」と「他の先生との連携活用」をクロスさせると、出発点では三つのテーマが浮かんでくる。

・これまでの子どもと保護者の情報を手に入れる。

### (2) 他の先生との連携活用

題への対策、指導の難しい子どもへの対応、安全・安心にかかわる教室環境づくりと不審者対応、事故や火災・地震など緊急事態への準備対策などである。最近、この課題が多くなったとしみじみ思う。

一つ目の『人材活用』は、他の先生に学級のために動いてもらうことだけでなく、学校内外の多様な人材

・さまざまなかかわりで子どもが生き生きと活動する。  
・事が起きたら、抱え込まずに相談する。

もちろん、これ以外にも力を入れて取り組むべき当面のテーマはたくさんあるが、この三つは他の先生との連携を活用しないといけない。

## これまでの子どもと保護者の 情報を手に入れる

### (1) 担任した子どもに関する「重要な個人情報」

連携活用の主な対象は前担任となる。とくに、特別な支援が必要な子どもの学習や行動に関する情報が大切になる。これまでどのような姿が表れていたか。担任として、学年・学校としてどう配慮、対応したかなどの情報は、経営を構想する最大級の要因になる。保健室も訪ねる必要がある。

### (2) トラブルと対応の情報

大きなトラブルがあった場合、普通は管理職もかわっているで、できたら教頭や校長にも話を聞きに行くといよい。「校長先生、Aという子についてこうい

うことがあったと聞きました。私が知っておいたほうがよいことはありませんか」などと聞く。これは、校長としてはとてもうれしく、実に頼もしい。

### (3) 特別な配慮の必要な保護者・家庭の情報

最近では、ますますこのような情報が必要な保護者が増えている。わが子の側にしか身を置かないので、どうしても担任と話を通じない。感情の起伏が大きく、攻撃的になる。被害者意識が強く、わが子は何もしていない、すべてまわりが悪いからだとする。このような保護者にどう対応し、結果はどうだったのか、現在はどのような状況なのか、しっかり聞きたい。

### (4) 前担任の学級づくりの話

どんなことに力を注いだかと聞くのである。実際に聞いた内容を実践するかどうかは別のこと。それでも情報収集する。学級づくりの研修にするのである。要は、そういう姿勢での活用だ。前担任は「とくにないもしなかったけどさ」などと言いながら語り始めることだろう。この「他の先生から学ぶ」という前向きな真摯な姿勢は温かい人間関係をつくることに必ず働く。

他の先生との連携活用は人間関係づくりでもある。

## さまざまなかかわりで 子どもが生き生きと活動する

人材活用の側面では「子どもの居場所づくり」が有効である。出発点でのポイントの一つがここにある。

担任は、わが学級の子どものということで、子どもが一人残らず学級の中に「居場所」を見つけるようにと願い、努力することになる。これはこれでよい。

しかし、全員に「学級こそが居場所」「最大の居場所は教室」と考えやすい。それは無理である。無理だ、そこまでやらなくてよいと、自分を許すことをすすめたい。実力が抜群の教師なら可能かもしれないが、全員に最大級の居場所をなどという願いを「ねらい」にしないことである。重すぎて耐えられなくなりやすい。危ないのは、ねらい通りにならない子どもを「私に合わない子」として異端視してしまう場合が生まれることである。

そこで「他の先生との連携を活用する」なのである。つまり、居場所が学級をはみ出てよいことにし、学校のどこかで他の先生とのかかわりの中で、その子に

「その子なりの居場所」ができればよいということだ。学級は二番目でも三番目でもよい。行きたくない場所でなければよいのである。ある子には学級が「最大の居場所」になる。いろいろある。それで、子どもも教師もずっと居心地がよくなる。

他の先生とのさまざまなかかわりで子どもが生き生きと活動するように活用する。たとえば、小学校なら次のような先生である。

- ①クラブ活動での担当の先生
- ②児童会の委員会活動での担当の先生
- ③専科授業や交換・出張授業の先生（級外の先生）
- ④少人数指導のグループ担当の先生、ＴＴ指導の先生
- ⑤総合的な学習の時間でのグループ担当の先生
- ⑥保健室の先生（養護教諭）
- ⑦図書館の先生（司書、司書ボランティアの方）
- ⑧清掃担当場所の指導・監督の先生
- ⑨放課後の課外活動（部活動）の先生、ボランティアや地域スポーツ団体のの方々
- ⑩当校には市社会教育課の指導の下、毎週一回、地域住民の方々の組織的な活動として、放課後、校舎内で子どもと一緒に遊ぶ「ふれあいスクール」が進ん

ている。盛況である。この「先生」も候補である。

⑪当校には学習支援ボランティアの大学生が二人、週

三、四回教室に入っている。この「先生」も候補だ。当県の中学校なら、さらに二つが続く。

⑫適応指導教室の先生

⑬学校を巡回しているスクールカウンセラーの先生

## 事が起きたら、抱え込まずに相談する

学級に重大な事態が発生した。あるいは小さなことがこじれ大きなトラブルに発展した、などと危機的な場面への対応では組織を活用する。一人で抱え込まないことである。連携が必要ときに他の先生を避け、隠れて悩み、表に出たときには局面が深刻化しているケースが多い。他の先生の活用には開いた心がある。

校内なら「いじめ・不登校問題対策委員会」や「特別支援委員会」の先生方と対応を考える。学校外であれば、まずは教育相談所や相談センターのカウンセラー、病院や大学などの専門機関である。

場合によっては、教育委員会も含めた関係機関のそれぞれから人材が集まって対応を協議する「場」が組

織される。児童虐待などのケースである。事態が重大で緊急なとき、そのための組織が求められる。そして、そのような組織的な動きをする核、人材と人材を結んで機能させるかけし役は、普通、学年主任や生徒指導主任、特別支援コーディネーターなどであるから、まずその先生に話を持ちかけることから始まる。

当校にはもう一つの組織がある。地域の民生・児童委員の皆さんである。年二回、全民生・児童委員が学校に集まり、地域を担当する教師と情報交換している。また、多くの教育活動や研修活動を参観している。この日ごろの付き合いが基になっているので、いざ、重大な事態が生じたとき、学校に駆けつけてくださるのだと思う。すぐに対策会議をもつ体制がある。

## 「校長」をフル活用する

最後に、校長の立場から。それは、ホウ（報告）レン（連絡）ソウ（相談）だ。学校の危機管理の基礎・基本である。ホウレンソウのために給与をもらっているぐらいに思っている。どんどん校長を使ってもらいたい。